

食肉販売動向調査結果 (平成28年度上半期)

平成28年5月
独立行政法人農畜産業振興機構

当機構では、食肉の消費・販売動向を把握するため、年に2回、卸売業者や小売業者（量販店および食肉専門店）の協力を得て、食肉の取り扱いや販売見通しに関するアンケート調査を実施している。

今回は、平成27年度下半期（27年10月～28年3月）の実績および平成28年度上半期（28年4月～9月）の見通しについて調査を行った。概要は以下の通りである。

（参考）調査先と回収数

1. 調査方法
アンケート調査
2. 調査対象先と回収率
右表のとおり
3. 調査期間
平成28年2月1日～2月29日

調査対象先と回収率

（単位：社）

	調査先対象数①	回収数②	回収率（%）
			③ = ②/①
卸売業者			
牛肉	14	14	100
豚肉	10	10	100
小売業者			
量販店	21	21	100
食肉専門店	63	63	100

注：調査対象先は、食肉の市況（仲間相場）や小売価格について、当機構が定期的に調査を実施している企業（全国の主要卸売業者および主要量販店並びに食肉専門店）

目次

I 卸売業者

- 1 最近の食肉の取扱割合・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1頁
- 2 食肉の部位別販売見通し・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2～3頁
- 3 和牛の取扱見通し・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4頁
- 4 黒豚・イベリコ豚の取扱見通し・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5頁

II 小売業者

- 1 最近の食肉の取扱割合・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6頁
- 2 食肉の販売見通し・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7頁
- 3 食肉の販売拡大に向けた対応・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8～9頁
- 4 和牛の取扱見通し・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10頁
- 5 黒豚・イベリコ豚の取扱見通し・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11頁

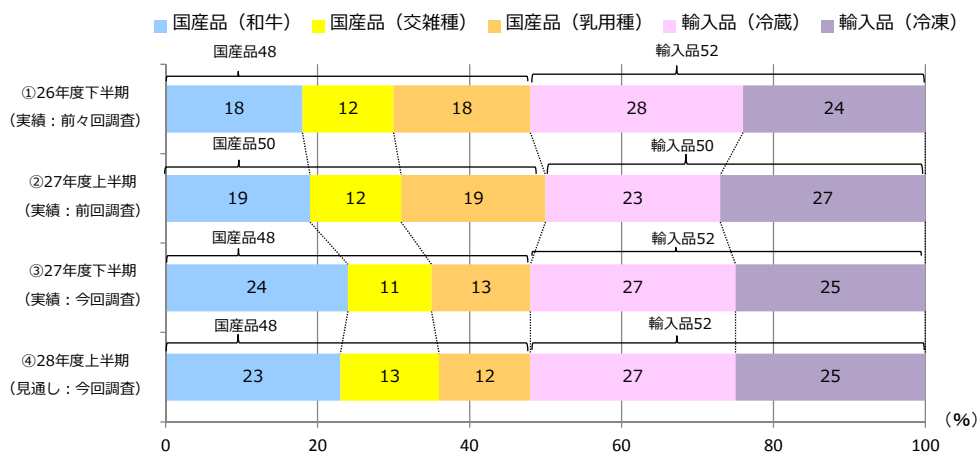
【要約】

- 平成28年度上半期の食肉の販売動向は、卸売業者・小売業者ともに、記録的な高値が続く国産牛肉の取扱量がおおむね減少し、輸入牛肉や供給量の増加が見込まれる豚肉などにシフトする見通しとなっている。
- 消費者の低価格志向や赤身肉志向を受けて、卸売業者・小売業者では、和牛4・5等級の取扱量を減らす一方で、付加価値の高い商品を求める消費者に対応するための品揃え拡充の一環として、黒豚やイベリコ豚の取扱量を増加する動きが見られる。

牛肉

～ 高価格の和牛から交雑種へシフトする見通し～

- 27年度下半期の卸売業者における牛肉の取扱割合の実績（重量ベース、以下同じ。）は、**国産品48%、輸入品52%**となった。
- 27年度上半期実績と比較すると、国産品が2ポイント低下し、輸入品が2ポイント上昇した。
- 28年度上半期の見通しは、27年度下半期実績と大きな変動はないものの、**国産品のうち、和牛及び乳用種がわずかに減少し、交雑種がわずかに増加**している。高価格の和牛を敬遠し、より安価な交雑種へシフトする意向の業者が一定程度いることがうかがえる。輸入品については、「米国での出荷頭数の回復に伴い、米国産牛肉の需要が高まる」との回答が得られた。

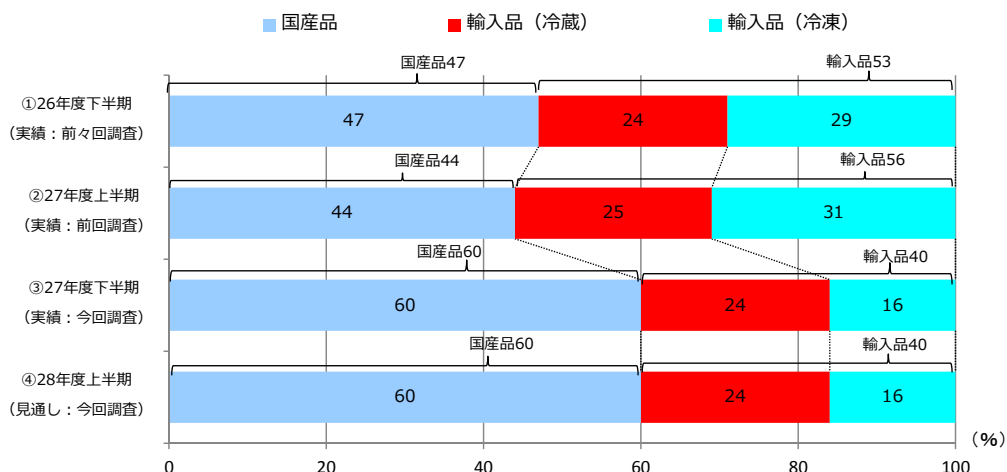


注：データは、各社の取扱割合（重量ベース）の単純平均を使用。

豚肉

～ 供給力の回復に伴い、国産品の割合が増加する見通し～

- 27年度下半期の卸売業者における豚肉の取扱割合の実績は、**国産品60%、輸入品40%**となった。
- 27年度上半期実績と比較すると、国産品が16ポイント上昇し、輸入品が16ポイント低下した。過去からの推移をみると、国産品の割合が大幅に増加している。これは、国内において豚流行性下痢（PED）が沈静化し、供給力が回復したことにより仕入価格が低下したことや、相場高の国産牛肉から価格優位性のある国産豚肉にシフトしていることなどが要因と考えられる。
- 28年度上半期の見通しは、27年度下半期実績と変わらず横ばいとなっている。



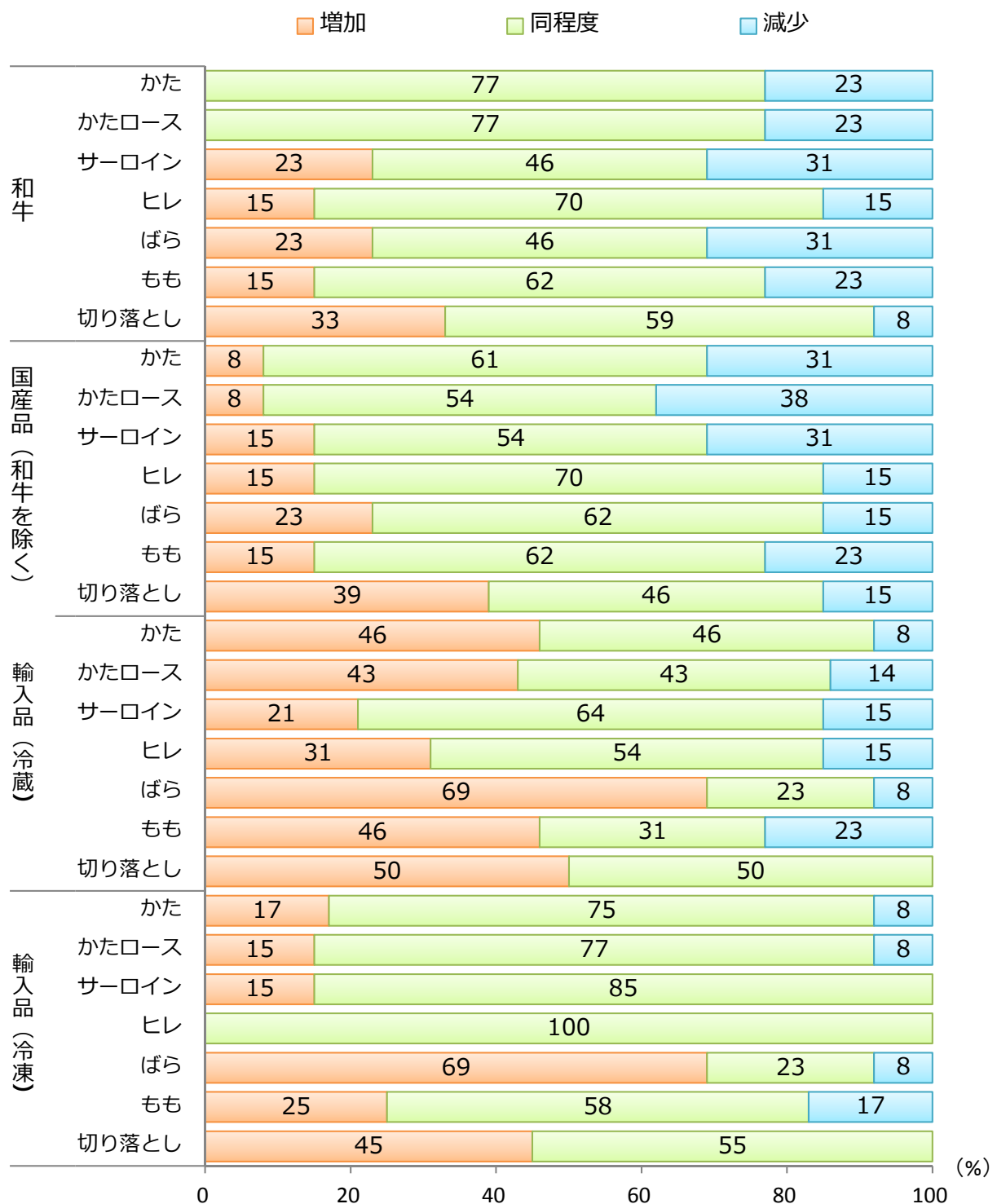
注：データは、各社の取扱割合（重量ベース）の単純平均を使用。

牛肉

～ 和牛および国産品は減少、輸入品は増加する見通し～

○28年度上半期の卸売業者における牛肉の販売見通し（前年同期比）については、全般的に**和牛および国産品は減少傾向、輸入品（冷蔵、冷凍）は増加傾向**となっている。

○部位別にみると、和牛については、高値の影響により、「ヒレ」、「切り落とし」を除いて「減少」が「増加」を上回った。「ヒレ」を「増加」と回答した理由として、「ホテルやレストランなどの外食向け需要の拡大」といった理由が挙げられた。国産品（和牛を除く）については、「ヒレ」、「ばら」、「切り落とし」を除いて「減少」が「増加」を上回った。一方、輸入品（冷蔵・冷凍）については、全部位で「増加」が「減少」を上回った。中でも、「ばら」は冷蔵・冷凍品とも増加が顕著となっており、一昨年高騰していた米国産ばら肉の価格が低下していることが一因と考えられる。



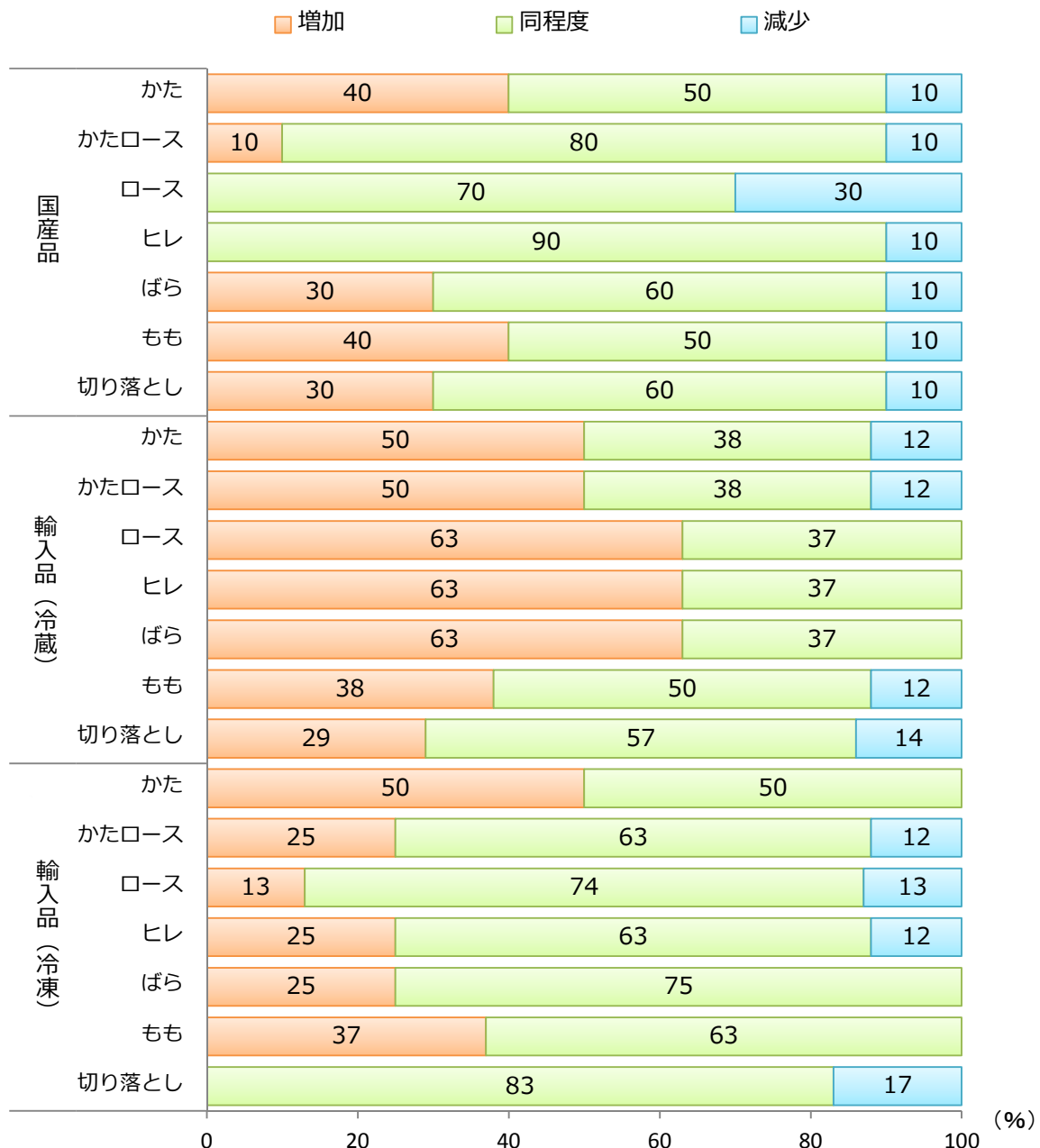
豚肉

～ 国産品・輸入品ともに「増加」が「減少」を上回る見通し～

○28年度上半期の卸売業者における豚肉の販売見通し（前年同期比）については、**国産品、輸入品ともに、おおむね「増加」、あるいは「同程度」**であった。「同程度」の理由として、国産品、輸入品ともに安定した供給量が見込まれることに加え、一定の市中在庫があるためといった回答が得られた。

○部位別にみると、国産品では「かたロース」、「ロース」、「ヒレ」を除いて「増加」が「減少」を上回った。国産品の増加理由として、PEDの終息により生産量の増加が見込まれるためといった回答が得られた。一方、輸入品（冷蔵）は全部位で「増加」が「減少」を上回り、輸入品（冷凍）は「ロース」、「切り落とし」を除いて「増加」が「減少」を上回った。

○輸入品（冷蔵）の増加理由として、北米からの安定供給が見込まれるためといった回答が得られた。輸入品（冷凍）「ロース」を「減少」と回答した中には、27年11月の世界保健機関（WHO）の食肉加工品に対する健康懸念報道の影響によるギフト販売不振に伴うロースハム需要量の減少を懸念する声もあった。

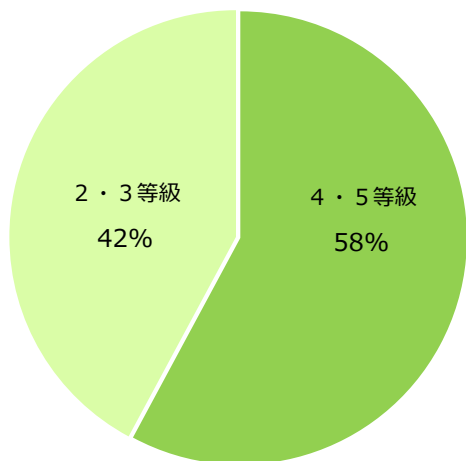


和牛の等級別取扱見通し

～ 4・5等級は58%、2・3等級は42%～

○28年度上半期の卸売業者における和牛等級別の取扱見通しについては、**4・5等級は58%、2・3等級は42%（前年同期並み）**となっている。

卸売業者（合計12社）



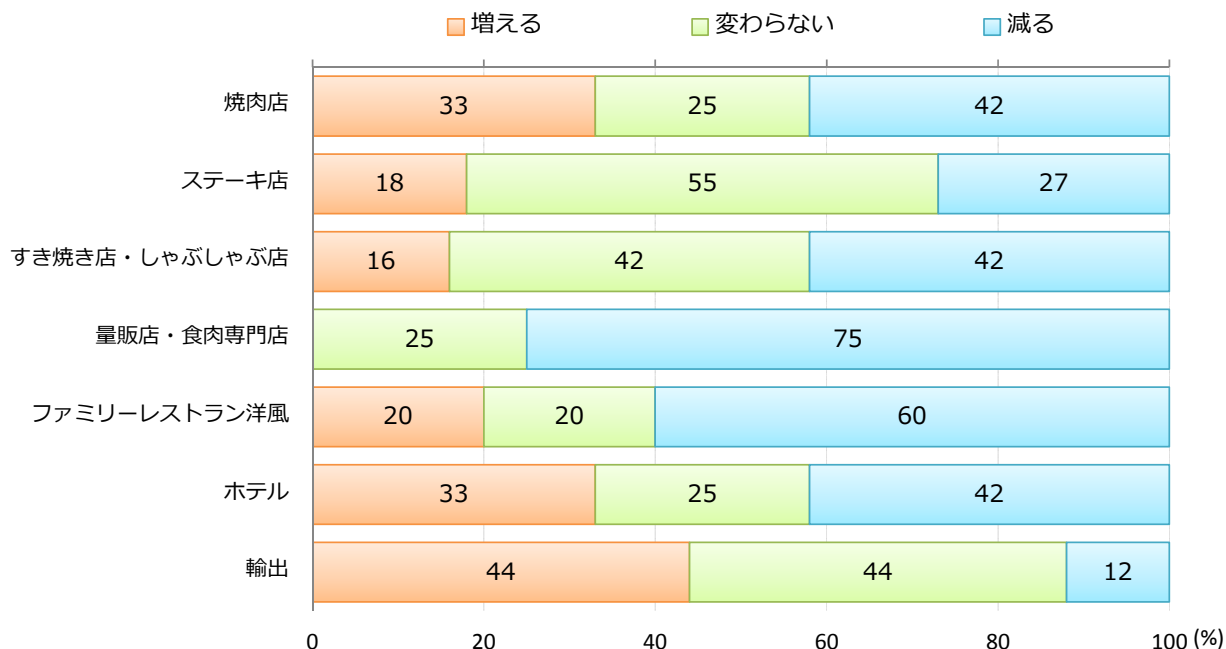
和牛4・5等級の販売先別販売見通し

～ 輸出向けを除き、「減少」が「増加」を上回る見通し～

○28年度上半期の卸売業者における和牛4・5等級の販売先別販売見通し（28年度上半期）については、**輸出向けを除いて「減少」が「増加」を上回った。**

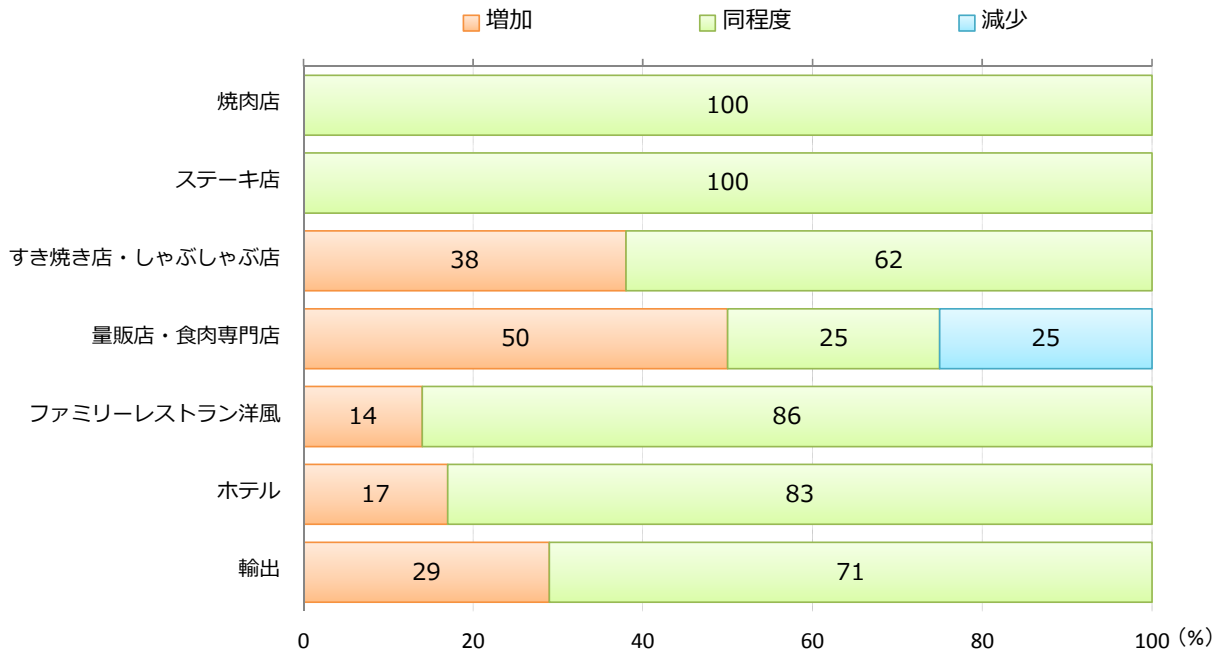
○特に、外食向けに比べて、本調査の対象となっている量販店・食肉専門店向けの減少傾向が顕著であるが、その理由として「相場高」、「消費者の低価格志向」が多く挙げられた。ステーキ店、すき焼き店・しゃぶしゃぶ店において、「変わらない」が多く占めている理由として、「メイン商材のため相場高でも必要となる」といった回答が得られた。

○増加理由としては、「訪日外国人の増加に伴うインバウンド需要の増加」、「景気回復」などが多く挙げられた。



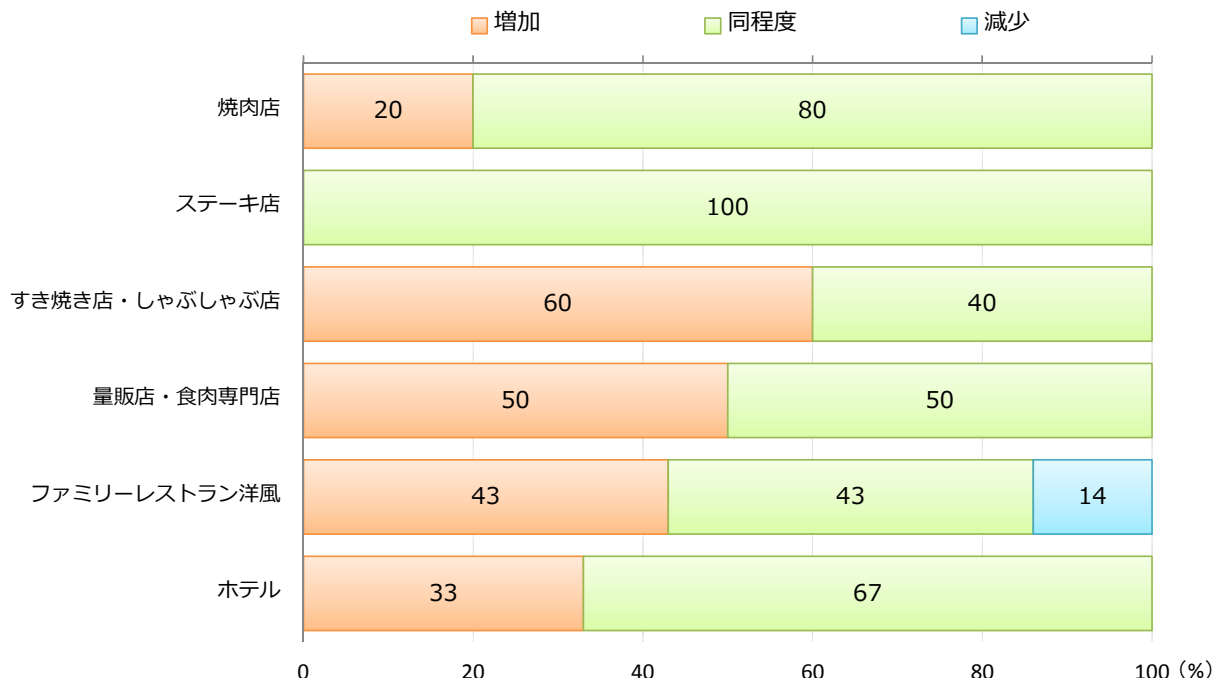
黒豚の販売先別販売見通し ～ 和牛から高級豚肉へシフトする動き ～

○白豚（三元交配の一般的な豚）と比べて価格の高い黒豚（バークシャー純粋種）の28年度上半期の卸売業者における販売先別販売見通しについては、**おおむね堅調**であった。特に、本調査の対象となっている量販店・食肉専門店向けの増加傾向が顕著であるが、その理由として、「景気回復」、「相場安」、「和牛から高級豚肉へのシフト」などが挙げられた。



イベリコ豚の販売先別販売見通し ～ 相場安、輸入量の増加に伴い、増加する見通し～

○高級銘柄豚として知られるスペイン産イベリコ豚の28年度上半期の卸売業者における販売先別販売見通しについては、ファミリーレストラン洋風向け以外は、「減少」するとの回答は見られなかった。特に、すき焼き店・しゃぶしゃぶ店のほか、本調査の対象となっている量販店・食肉専門店向けの増加傾向が顕著であるが、その理由として、「相場安」、「輸入量の増加」などが挙げられた。



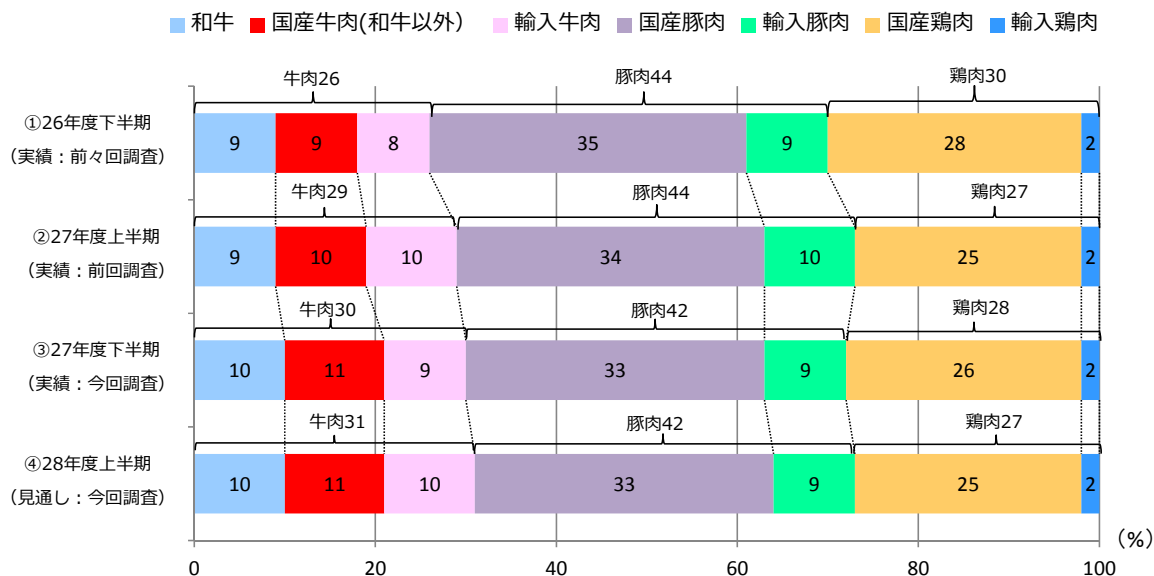
量販店

～ 牛肉がわずかに増加、鶏肉がわずかに減少する見通し～

○27年度下半期の量販店における食肉の取扱割合の実績は、**牛肉30%、豚肉42%、鶏肉28%**となった。

○27年度上半期実績と比較すると、豚肉が2ポイント低下し、牛肉、鶏肉はそれぞれ1ポイント上昇した。

○28年度上半期の見通しは、牛肉31%、豚肉42%、鶏肉27%であり、平成27年度下半期実績と比べて、牛肉がわずかに増加し、鶏肉がわずかに減少している。



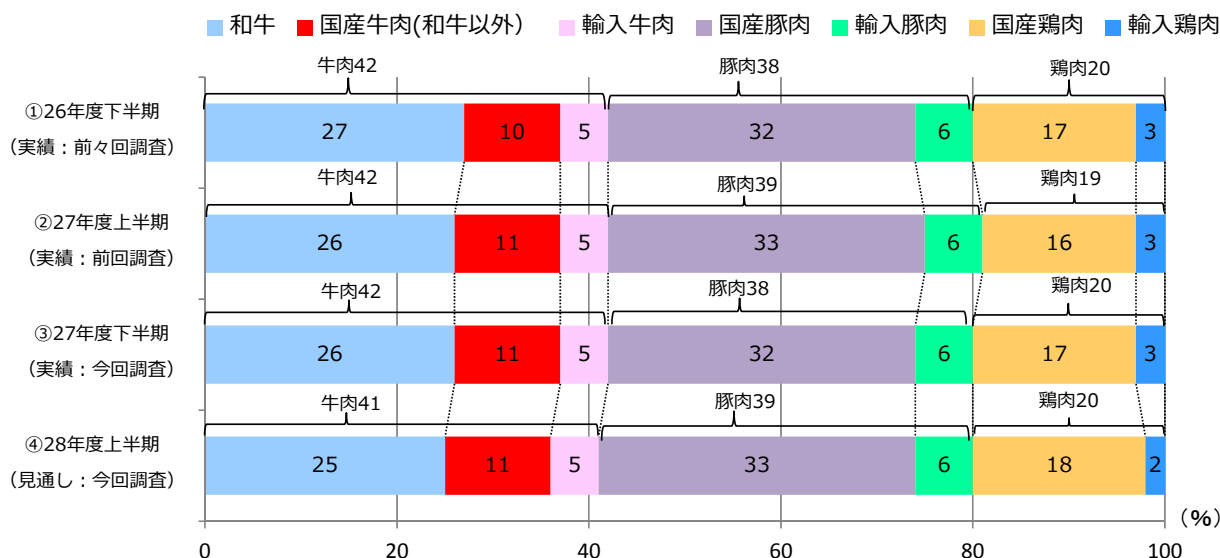
食肉専門店

～ 牛肉がわずかに減少、豚肉がわずかに増加する見通し～

○27年度下半期の食肉専門店における食肉の取扱割合の実績は、**牛肉42%、豚肉38%、鶏肉20%**となった。食肉専門店は、量販店と比べて牛肉の取扱割合が高く、鶏肉の割合が低いことが特徴である。

○27年度上半期実績と比較すると、豚肉が1ポイント低下し、鶏肉が1ポイント上昇した。

○28年度上半期の見通しは、牛肉41%、豚肉39%、鶏肉20%であり、27年度下半期実績と比べて、牛肉がわずかに減少し、豚肉がわずかに増加している。



量販店

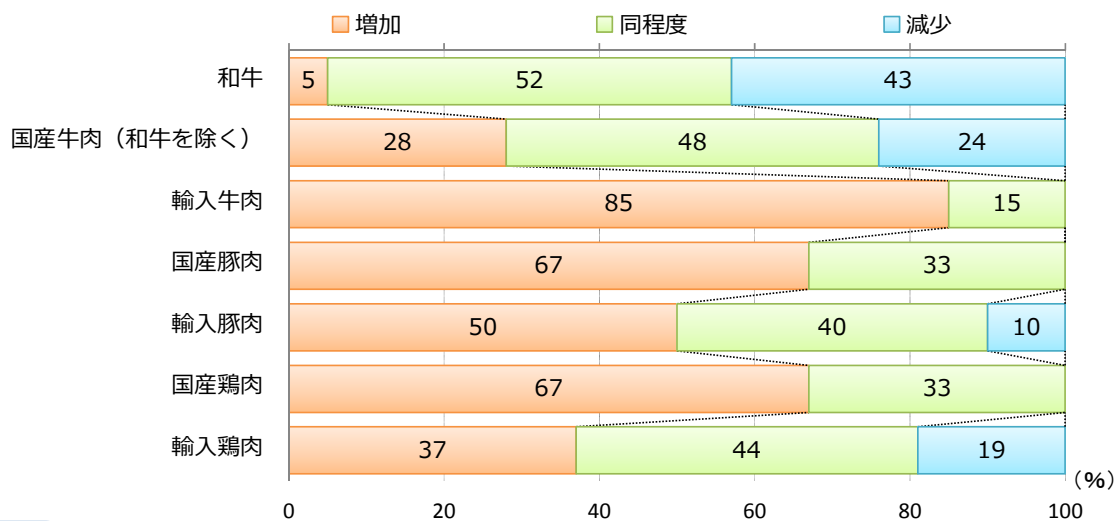
～ 和牛を除き、「増加」が「減少」を上回る見通し～

○28年度上半期の量販店における食肉販売見通し（前年同期比）については、**和牛を除いて「増加」が「減少」を大きく上回った。**

○輸入牛肉および輸入鶏肉の増加理由としては、「消費者の低価格志向」が多く挙げられた。

○国産牛肉（和牛を除く）、国産豚肉、輸入豚肉及び国産鶏肉の増加理由として、「他畜種からの需要シフト」が多く挙げられた。

○一方、和牛の減少理由として、「他畜種へのシフト」、「特売回数の減少」が多く挙げられた。



食肉専門店

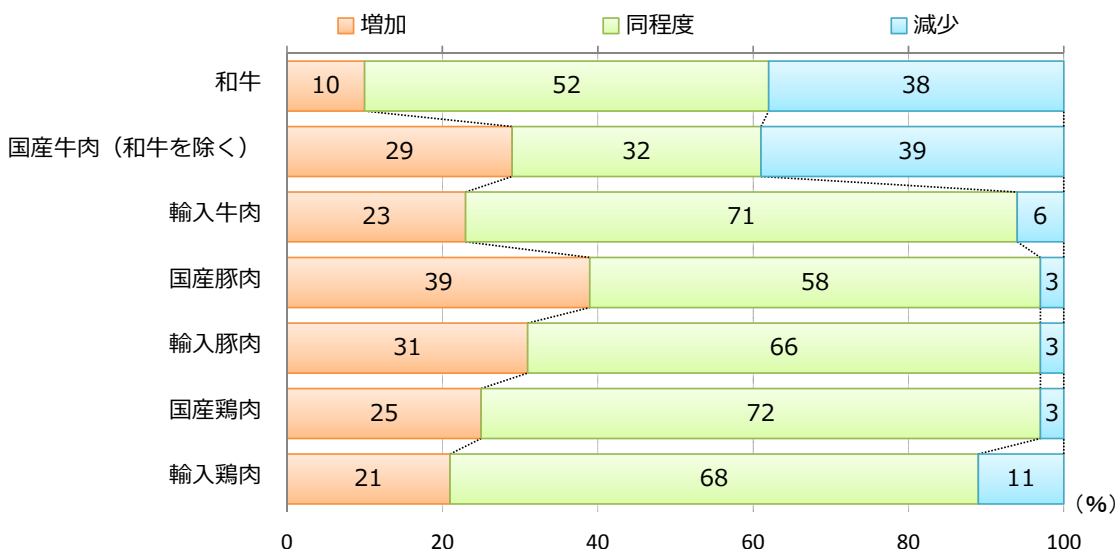
～ 和牛・国産牛肉を除き、「増加」が「減少」を上回る見通し～

○28年度上半期の食肉専門店における品目別販売見通し（前年同期比）については、**「同程度」が最も多く、和牛、国産牛肉（和牛を除く）を除いて「増加」が「減少」を上回った。**

食肉専門店は量販店と比較して固定客が多く、食肉の銘柄、品揃えなどを大きく変更しない傾向が強いことから、「同程度」が多いものと考えられる。

○輸入牛肉の増加理由としては、「仕入価格低下分の小売価格引き下げが可能」が多く挙げられた。また、国産豚肉及び国産鶏肉は、「他からの需要シフト」、「消費者の国産志向」、輸入鶏肉は「消費者の低価格志向」が多く挙げられた。

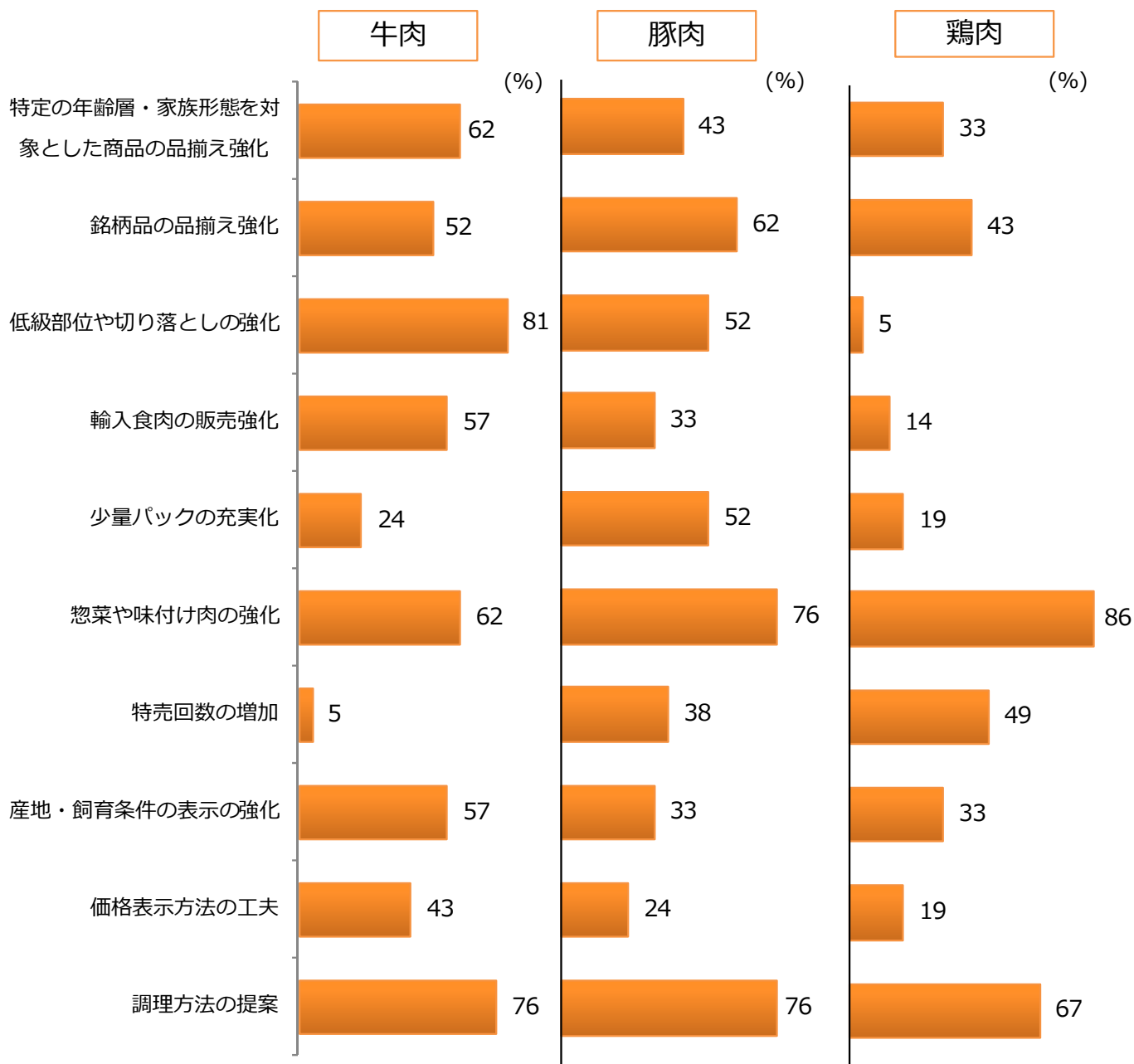
○和牛および国産牛肉（和牛を除く）の減少理由としては、「仕入価格上昇分の価格転嫁が困難」が多く挙げられた。



量販店

～ 牛肉の高値に対応するため、販売促進の方法に変化～

- 量販店における販売拡大に向けた具体的な対応については、**牛肉**では1位が「**低級部位や切り落としの強化**」、2位が「調理方法の提案」、3位が「特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化」及び「惣菜や味付け肉の強化」であった。
- 豚肉**では1位が「**惣菜や味付け肉の強化**」および「**調理方法の提案**」、3位が「銘柄品の品揃え強化」であった。
- 鶏肉**では1位が「**惣菜や味付け肉の強化**」、2位が「調理方法の提案」、3位が「特売回数の増加」であった。
- 前回調査と比べると、特に牛肉について、「低級部位や切り落としの強化」が大幅に増加しているほか、「特売回数の増加」が豚肉や鶏肉に比べて大幅に減少するなど、高値が継続する状況に対応するため、販売促進の方法に変化がみられた。また、家庭での調理を簡便化する商品ニーズを反映した「惣菜や味付け肉の強化」、購買意欲を促すための「調理方法の提案」は全畜種とも過半を占めた。



食肉専門店

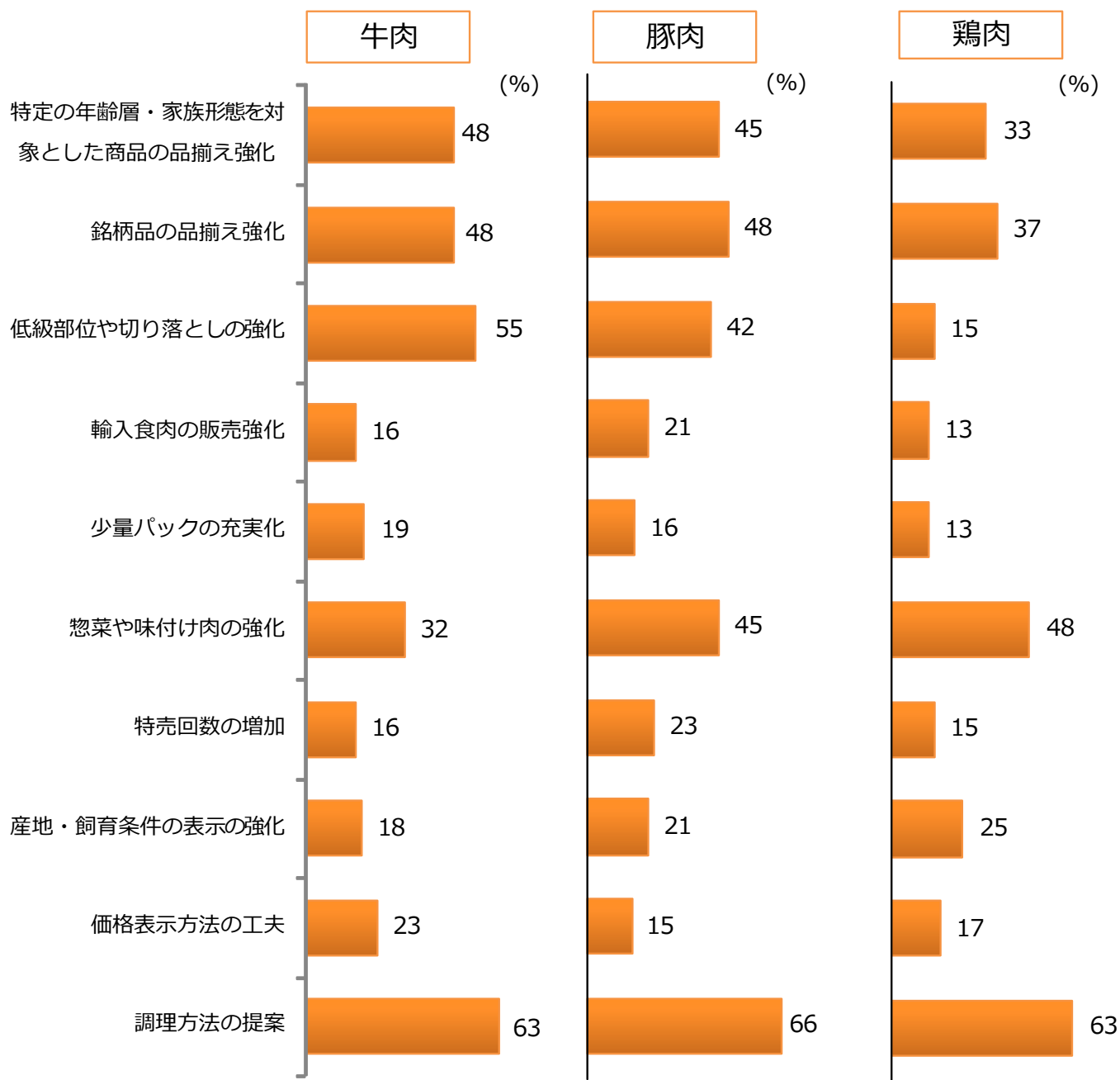
～ 「調理方法の提案」 が最多 ～

○食肉専門店における販売拡大に向けた具体的な対応については、**牛肉**では1位が「**調理方法の提案**」、2位が「低級部位や切り落としの強化」、3位が「特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化」および「銘柄品の品揃え強化」であった。

○**豚肉**では1位が「**調理方法の提案**」、2位が「銘柄品の品揃え強化」、3位が「特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化」および「惣菜や味付け肉の強化」であった。

○**鶏肉**では1位が「**調理方法の提案**」、2位が「惣菜や味付け肉の強化」、3位が「銘柄品の品揃え強化」であった。

○牛肉、豚肉、鶏肉いずれも「**調理方法の提案**」が最も多い他、「銘柄品の品揃え強化」、「低級部位や切り落としの強化」のポイントが増加しており、小売価格が上昇する中、量販店と同様に、消費者の食行動、購買行動に対応した商品作りの姿勢がうかがえた。

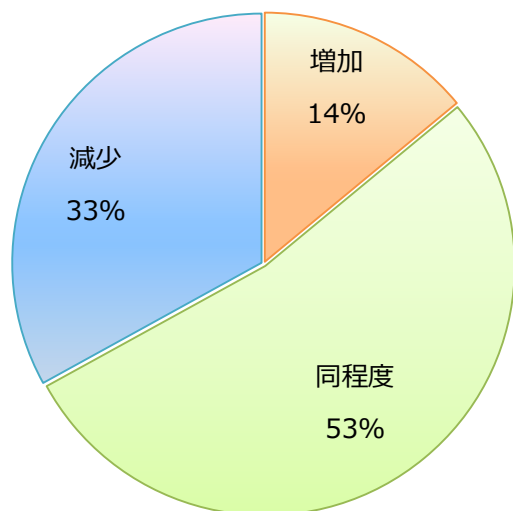


和牛4・5等級の取扱見通し

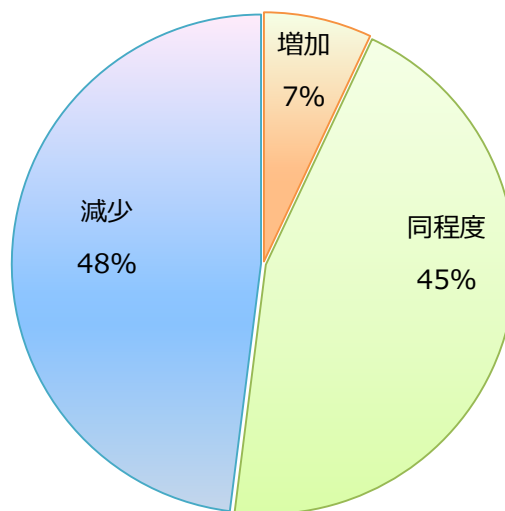
～ 消費者の赤身肉志向や相場高により、「減少」が「増加」を大きく上回る見通し～

○28年度上半期の小売業者における和牛4・5等級の取扱見通しについては、**量販店および食肉専門店ともに「減少」が「増加」を大きく上回った**。減少理由として、量販店では「消費者の赤身肉志向」、食肉専門店では「相場高」が最も多く挙げられた。一方で、増加理由として、「他社との差別化」、「景気回復」といった回答が得られた。

量販店（合計21社）



食肉専門店（合計62社）

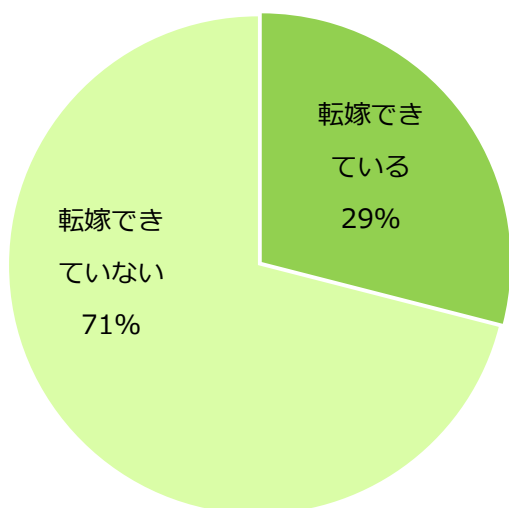


和牛の仕入価格上昇に伴う小売価格への転嫁状況

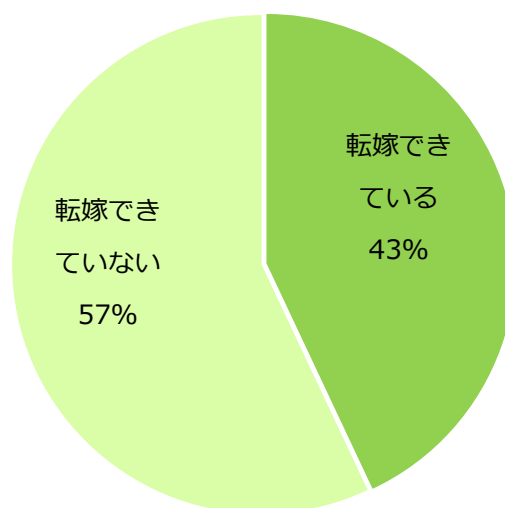
～ 顧客離れの懸念から、「転嫁できていない」が過半～

○和牛の仕入価格上昇に対する小売価格への転嫁状況については、量販店および食肉専門店ともに**「転嫁できていない」が過半**を占めており、中でも、量販店は71%と特に高い水準となっている。転嫁できない理由については、量販店および食肉専門店ともに**「顧客離れの懸念」**が最も多く挙げられた。その他、「消費者の低価格志向」、「卸売価格の上昇に追いつかない」といった回答が得られた。

量販店（合計21社）



食肉専門店（合計60社）



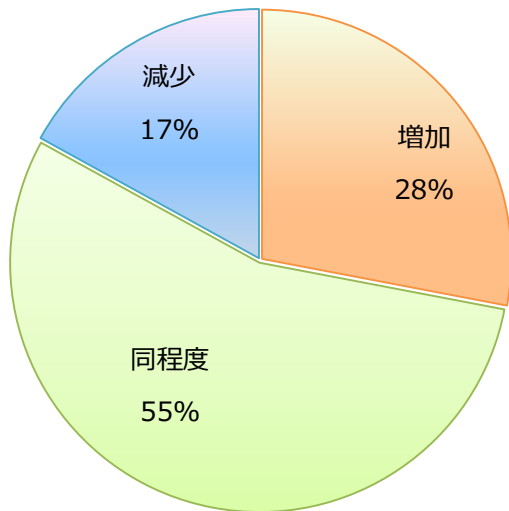
黒豚の取扱見通し

～量販店では「増加」傾向、食肉専門店では「同程度」の見通し～

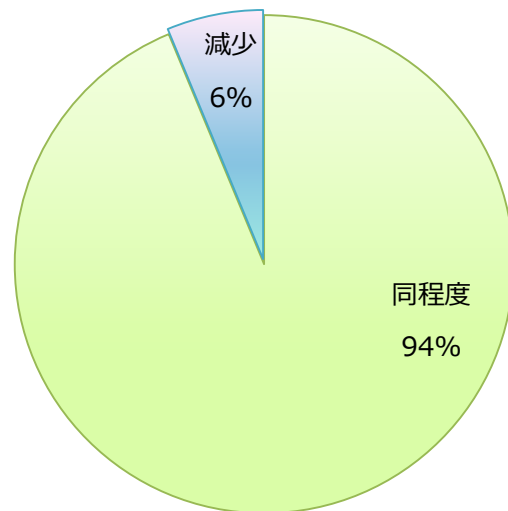
○28年度上半期の小売業者における黒豚の取扱見通しについては、**量販店では「増加」が「減少」を上回った**。一方、**食肉専門店では「同程度」が9割以上**を占めた。

○量販店の増加理由については、「景気回復」が最も多く挙げられている。一般的に、黒豚は流通量の多い白豚と比べて割高であるが、量販店では付加価値の高い商品を求める消費者に対応するための品揃え拡充の一環と位置づけられているものと考えられる。また、食肉専門店の同程度の理由としては、「黒豚以外の銘柄豚の強化」といった回答も得られた。

量販店（合計18社）



食肉専門店（合計16社）



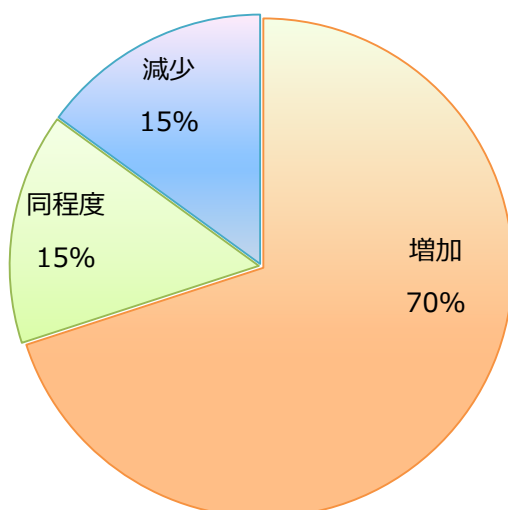
イベリコ豚の取扱見通し

～「増加」が「減少」を大きく上回る見通し～

○28年度上半期の小売業者におけるイベリコ豚の取扱見通しについては、**量販店および専門店ともに「増加」が「減少」を大きく上回った**。

○量販店および食肉専門店の増加理由についてみると、「輸入量の増加」が最も多く挙げられた。その他、「イベリコ豚に対する消費者のイメージが良い」、「消費者の味へのこだわり」、「1ランク上の品揃え志向」、「和牛や国産牛肉に比べれば安価」といった回答が得られた。

量販店（合計13社）



食肉専門店（合計7社）

